

「思いやりのかたち」

平内町立西平内中学校 二年 須藤 さやか

「おねえちゃん、何で笑わないの？」  
ある時、そう小学校低学年の男の子に聞かれた。  
私は何も応えることができなかった。小さい子は嫌だ。何でもずばつと言うし、私はそれを受け止めて我慢しなくちゃならない。我慢すると疲れるし。先生に相談したいけど先生は私のことを買って来ていて、期待されるのは嬉しいけど、責任が重い。私は完璧じゃないのに……。  
小学校の高学年の頃は自分は暗かった。人前に出るのが嫌だった。学校にも行きたくないなど思うこともしばしばだった。人目を気にし、自分がどう思われているのか、不安で仕方がなかった。

「えー、嫌だあ。それやりたくない。」  
「間違ってるじゃん、アハハハハ……。」

ある日の授業。自分が発表した意見や解いた答えを否定されたり、バカにして笑われたりして、それ以来、何だか周りの反応に対して敏感になった。クラスメイトの反応が怖くなっていった。少しずつ。徐々に、でもそれは確実に私の心を蝕んでいったようだ。

「みんなは別に自分のこと嫌がって言っている訳じゃないし。」  
と自分に言い聞かせてはみるが、やはり、ネガティブになる自分がどんどん大きくなっていった。そして、どうせ言われるんだつたら発表なんてしない、と手を挙げることもやめた。そればかりか、友達と話すことさえも怖くて、いつも、

「そうだよね。」

よ相づちを打つだけだった。それは自分の考えた防御策。自分から話さなくてもすむし、友達からも嫌われない。

でも、それはとても虚しかった。言いたいことも言えず、自分が何なのか、存在する意味がないようにも思えた。心はいつも嘆いていた。

「おねえちゃん、何で笑わないの？」

この低学年の男の子はいつも笑わない私を見て、ただ単に不思議に思っていただけなのだろう。しかし、その言葉がずっと心から消えなかった。変わらなくちゃ、と思っているのに、その心を狭い部屋の中に押し込んで鍵までかけていた。

「変身」のきっかけをつかめないままに、私は中学生になった。中学校では一っしか違うない友達が、小学校の時とは比べものにならないほど、遠い存在。先輩は大きかった。

「どうせ、これからもつまらない生活だろう。」  
そう思っただけで疑わなかった。

「さやか、間違ってくれてありがとう。」

授業中、私は間違った答えを発表したのに、そう声をかけてくれた先生。

「ここはよく間違えるところだから、あなたが間違ってくれなかったら詳しく教えられないし、テストでも他の人が間違えてしまいかもしれないからね。それに、みんな正解だったら、私も教えがいが無いしね。」

と微笑みながらおっしゃった。

驚いた。間違えたのに「ありがとう」だなんて、おもしろい先生。押し込められていた私の心はふっと軽くなったようだった。自然と間違えることへの怖さは消え、周りの反応が気にならなくなった。先生の思いやりを感じ、嬉しさを思わずにつこりと笑顔になつていた。微笑んだ先生の瞳は間違いをとがめることなく、不安な私の表情をしっかりと見ていてくれた。私は先生から「言葉には人を救える力がある」ということを教えてもらった。

先生だけではなく、友達からもだ。私が部活でミスをしたとき、友人がかけてくれた言葉。

「そんなに落ち込まないで。女の子はポジティブでなくちゃ。」

彼女は他の小学校から来た子。彼女が冗談交じりに私を励ましてくれる。今では一番の親友だ。部活のことでは、時には意見が違つてけんかもある。でも、よく話し合つてチームのために一番の選択をする。

「言葉」はとても簡単に口から出てくる。

しかし、簡単に言えるから、言っている本人が気づかないうちに、

誰かを傷つけているかもしれないのだ。どんな人でも自分の考えや感じ方はあつて、それは千差万別だ。だからこそ相手の考えを尊重しなければならぬし、尊重しあえばこそ集団がまとまつていく。

私は『死ね』『ウザイ』などの、言つた人も言われた人も悲しくなる言葉は絶対に口にしない。相手の存在を無視した言葉は嫌だ。

むしろ私は、「言葉」をいじめられて泣いている友達、悩みを抱えている友達を救うものにしたかと思つている。だから私は『大丈夫』『頑張ろう』『ありがとう』という相手を元気にする言葉をたくさん伝えたい。それがあの苦しい時を乗り越えたわたしにできる思いやりのかたちであると思う。